

地理教材としての地形圖

(第二輯)

七、天草下島

所要地圖

二十萬分一帝國圖 八代號、

五萬分一地形圖 口之津、本渡、牛深の三葉

七萬五千分一天草地質圖。

同

三四一號、大正一一年。

九州古第三紀層の層序、地學雜誌第三八卷

第四四五—四五〇號、大正一五年。

納富重雄 七萬五千分一天草地質圖及び地質説明書「天

草」昭和五年。

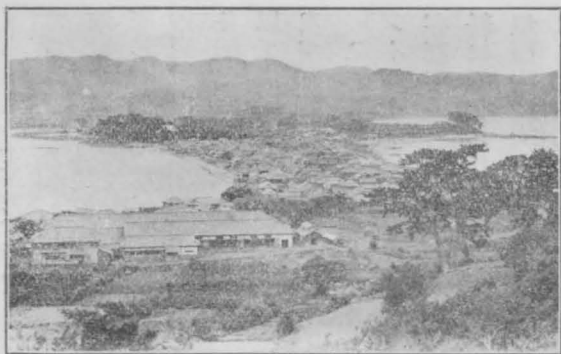
緒言 天草下島は島原灣と八代海の西方にあつて、北々東から南々西に長く、約四十六軒半、巾は中央部に於て二十二軒の小島で、東は狭き本渡の瀬戸によつて天草上島に接し、二百十八米の開閉橋が架けられて居る。

天草島は早くから地學者の注意を惹き、幾多の文献がある。鈴木敏、山下傳吉、金原信泰、久原幹雄、矢部長克、河合澤、長尾巧、納富重雄の諸氏の地質、層序、化石、鑛床等に關する研究は其の主なるものである。これ等の中には容易に得難いもの、未發表のものなどがあるが次の二三は得易い文献である。

長尾 巧 天草の地質略報、地質學雜誌第二九卷、第

地形 下島の最高山地は島の中央より稍々西に偏せる福連木村附近で五三八米に及び、三〇〇—四〇〇米の隆起部はこの附近から北々東南々西に、島の延長と殆んど平走する。この隆起部の東は低地が斷續して、下島に於ける自然の通路として利用されて居る。この低地の東は再び二〇〇—四〇〇米の山地になつて居る。即ち地形圖につきて山と谷との配列を概観すると島の方向に延長する二條の隆起部とその間に斷續する低地部からなるを知る。更に島の南半と北半とを比較すると、島の輪廓が甚だ異つて居

ることに気がつく。南半は複雑な出入や小島に富み、北半は單調な形をなして居る。即ち、南



海段丘より東に富岡町を瞰す

部の灣入で最大なるは浦内灣で不規則なる形をなして西より入り込み、更に軍ヶ浦、崎津浦、龜浦、早浦等の不規則な小灣を分つて居る。魚貫、牛深附近の入江も複雑を極めことに牛深は

單調なる海岸に於ては富岡の陸繋島が獨り單調をやぶる。富岡の西には周圍七軒の小島（唐見島）があつて、狭い砂洲によつて下島に連つて居る。更に地形圖「口之津」を見ると、北部海岸には處々に低い海岸段丘が發達することに気がつく。例へば志岐村附近の如きそれで五米乃至十米の礫層から成り、富岡附近でも處々に認められるがことに町の西方富岡小學校の存在する附近は五米の礫層より成る段丘である。

かくの如く下島は南北で甚だ異つた地形を有して居る。今、島の北東本渡町から南西大江村に一線を畫くときは、この線より北西と南東とは海岸の形が甚だしく差違を示してゐるのである。或はこの一線を軸として、近き地質時代に於て北西は隆起し、南東は沈降したといふ様な運動をなしたかの如く思はれるのである。

地質 七萬五千分一地質圖が刊行されて天草の地質は甚しく明瞭になつた。下島に露出する最古の岩層は結晶片岩、雲母片岩等より成る三

南方に小嶼碁列して、天然の良港をつくる。これ等の小入江と小島は溺没谷と残址島であることは地形によつて首肯し得る處である。北部の

波川系古生層で西岸高濱の南方の小地域に露出し、不整合を以てイノセラムス、トリゴニアを産する上部白堊紀層に接する。この白堊紀層は天草諸島の東部にある御所浦、獅子島等にも發見されて居る。古第三紀層(始新層)はこれ等の地層を不整合に被覆して、下島には最も廣く分布し、又ムライトの化石を産する頁岩、礫岩、砂岩、白又は黃色頁岩、砂岩互層、夾炭砂岩、各種化石砂岩、海綠砂岩及び黑色頁岩の順序を以て成層する。島の北部には島原半島の基盤をなす鮮新層の分布を見る。

これ等の成層岩を貫いて安山岩、玄武岩、リンドナイト質石英粗面岩が岩脈をなして各地に存在する。石英粗面岩は陶石と稱して陶器の原料に採掘されて居る。富岡西方白石崎には石英粗面岩の大岩脈があつて黑色頁岩中に岩床とされる部もあり、電氣石の斑晶を多量に散點せしめて居る部分もある。

構造 下島の岩層排列の状況から見ると島の

北東、本渡町附近から南西、一町附近を経て魚貫に向ふ一線は大向斜軸をなし、この軸の西と東とに背斜軸がある。大體に於て前述の下島に於ける隆起部は背斜部に當り、本渡から牛深方面に通ずる道路のある低地部は向斜部に相當する。依つて吾人は天草に於ては向斜谷、背斜山を見るべく、地質構造と地形とが直接の關係を有することに氣がつく。但し斷層や、變動のために局部的の變化は免れないのは當然である。

阿蘇熔岩 下島の北東部には阿蘇熔岩の存在する處がある。この熔岩は淡灰色乃至暗灰色又は黑色をなし恰も灰の塊の感ある熔岩で屢々柱狀節理をなし、流理の方向に黒曜石が伸展して存在する。納富學士によれば本渡町の西北、城河原村荒河内では二―三米の厚さに達するといふ。而して、本渡町の北、伊佐津に至る間には數ヶ所に露出し、而も明かに鮮新層中に介在する事實を納富學士は發見した。依つて阿蘇火山の活動は既に鮮新層沈積の時代から始まつて居

たことを知ると同時に其の熔岩は當時から存在してゐた有明海底を流れて、現今の天草下島北部までも達したのであつて、當時の活動の烈しかつたことを追想せしめる。(地學雜誌第四二年第九四號、納富學士による) 勿論當時天草下島の北部は海底にあつたのであるが、其後隆起して現今の陸地となつたのである。

天草の石炭 石炭は元、聖紀の生成にかゝるものとされて居たが夾炭第三紀層の下底に貨幣石の發見(地質學雜誌第三〇卷第三五三號、長尾巧)により明に古第三紀の生成にかゝるもので、他の九州北西部の石炭と時代を同じくするものと知られるに至つた。炭田は牛深、魚貫附近、一町田附近、志岐附近の三ヶ所に分かる。炭層は二尺内外を普通とし、褶曲や斷層が多くして採掘稍困難、現今は一町田の旭炭礦の外は殆んど休坑の状態である。炭質は良好で光澤よく發煙少く半瀝青炭乃至半無煙炭に屬するもので、之を天草では綺羅炭といふ。炭層中に火山岩が岩脈や

岩床をなして進入することが屢々あつて、その接觸部附近は變質し稍灰色を帯び、之を火中に投ずると爆碎する性質を帯びて居る。この種の石炭を瓦ヶ炭といひ、天然骸炭と稱すべき石炭である。過去十ヶ年間の出炭量は一ヶ年平均一五〇〇噸である。

交通と聚落 本渡町は島の北東海岸にあつて熊本、三角方面よりの汽船發着所、下島に於ける交通の要點、上島に到る要路に當り商工業が活潑である。富岡町は下島の北西に斗出する砂洲上にあつて、南西は渺たる天草灘に面し、賴山陽の吟詠地として知られ、北東は彎曲砂嘴に圍まれた巴浦の風光を慾にし、長崎方面と汽船の連絡が便利である。町の西方唐見ヶ丘は慶長七年寺澤廣高の築城以來富岡城のあつた處で、今は中腹の景勝の地に九州帝國大學臨海研究所が設立され、白堊の洋館が緑の松林の間に窺はれる。富岡町から自動車は本渡町を経て、下島の南端牛深港に通ずる、牛深港は熊本縣に於け

る漁港中第一位にあり、沿岸航路の寄港地であ

○ 天草は徳川時代に天主教を信ずる者の多かつた處で、現今も其の遺跡や傳説を殘し、寛永十四年天草一撥の際には富岡城の如きは教徒のために襲撃された。爾後天草は幕府の直轄となり代官によつて支配されることゝなつてゐた。

天草婦人の活動、島外出稼の風習は男子を凌ぐばかりであり、ことにその海外進出に至りては驚くの外はない。(上治)

新著紹介

○ 大地の構成 本間不二男著 古今書院發行

定價一圓二十錢

本書は一名を地殼變動論概説といふ、中に地學大觀、地表面の地學的特性、地球の地理的及び化學的性質、地殼變動論概説、我國に於ける地殼變動、岩漿の地力學、地形と地質との交渉の七章を含む、極めて流暢明快に書かれてあつて、いかにも難解のことが、さら／＼と平易にわかりやすく説いてあるといふのを以て、本書の特色とすべきであらう。(藤川)

○ 概観日本地誌上卷

山本熊太郎著 古今書院發行

定價四圓五十錢

本書はさきに出た香川氏の概観世界地誌の姉妹篇として出たものであるが、緒論と奥羽、關東、中部、近畿、中國、四國の七章から成立してゐる、日本の氣候區を四帶十二區に分ち地誌區として二十三區に分ち、さうした區分について土地と人文との關係を明にせんことをつとめたものである。猶簡單なしかし要領を得た地形略圖が多數に入つてゐて、著者苦心の跡を語る處が多い。人口分布にドットマップを用ひておられるが、これは著者の得意とする所であるけれども我々には明確に濃淡の感が出てこないで、點一つの位置についても疑を抱かしむる恐がある。猶工夫の必要があると思ふ。記事は一般に簡潔にして要を得てゐる。早く下巻が出て世に弘まらんことを望む。(藤川)

○ 尾瀬と鬼怒沼

武田久吉著 東京梓書房發行

定價三圓

本書は山岳通の人には、既によく知られた地名であるが、尾瀬といへば五萬分一地形圖の燦緑及藤原圖幅に見らるゝ深山であつて、そこに濕原尾瀬ヶ原がある、山間の小さい尾瀬の沼澤もある、夏期高山や深山の植物景觀を探ぐる人の手引にもと書かれたもので四六版三六九頁の本文に寫眞版百枚を附加した驚くべき美本である。價の廉なのが何よりも重寶である、本文亦美辭麗句にとみ決して乾燥な植物採集記ではな